

■「ちくま評論入門」解説——読解問題への過程

15 内田樹「他者の言葉」

●参考 内田樹『ユダヤ文化論 私家版』【316/41】
内田樹『街場の教育論』【371/US1】（北野高校図書館に他多数あり）

■目標

■追跡

① 外国語学校に英会話を習いに行くと、しばしば外国人の教師に、「英語で」日本の文化や社会についての意見を述べることを求められる。そのとき、私たちは実に定型的な言葉づかいで自国について語っている自分に気づく。

まあ、あんまり凝った構文単語も使えないしね（笑）。そういう問題でもないか。

② 経験のある方も多いだろうが、「英語」で日本社会について語ろうとすると、私たちは好む好まざるにかかわらず、ほとんど自動的に「欧米から見た日本社会についての固定観念」（集団主義、個性を抑圧する教育、創造性の欠如、巧妙な「ものまね」、アメリカ追従、アジア蔑視……）を語ってしまう。というのは、日本を「外から」冷たく突き放して批判的にコメントする英語のフレーズはどんどん湧き出てくるのに、その反対に、欧米の人々が見逃していること、気づいていないことのうちにも「すばらしいもの」があるのだということを説明するための言い回しが私たちの貧弱な英語語彙のどこにも存在しないからである。

正確には、「欧米から見た日本社会についての固定観念」と日本語話者が想像している固定観念。

さて、問いは、「欧米の人々が見逃していること、気づいていないことのうちにも「すばらしいもの」があるのだ」ということを説明するための言い回しが私たちの貧弱な英語語彙のどこにも存在しない」のは、どうして？ということ。勉強が足りないから？

③ でも、それが当然なのだ。

④ 私たちは英会話のレッスンを通じて、英語圏の人々が日常的に繰り返すストックフレーズを暗記させられる。そうやって私たちは、英語圏の人々に固有の価値観や美意識を身体化させてゆくことになる。英語的な発想法や世界の切り取り方を身体に刷り込むというのが、「英語が使える」ということである。そうである以上、英語を使って、「英語話者には見えない事象」、「英語話者がこれまで一度として言語化したことがない概念」を語るということは、**読解問題1**きわめて困難な、ほとんど不可能な企てだということがわかる。

なるほど。ある言語体系には、その言語体系固有の世界の切り取り方（分節の仕方、分け方）がある。これは学習済みだ。英語では「ホット／ウォーター」と二語でいうところ、日本語では「おゆ」と一語でいう。「みず」と分節され、別の何ものかとして名づけられる「おゆ」。ウォーターのちよつとホットなヤツという呼び方とは違う価値を帯びている、その「おゆ」に、日本列島の住人は首まで浸かることを好む。「冬のおゆは、ごちそうです」って表現してみようとしても、ホット・ウォーターを飲むのがちそうなのか、こいつらは！としかならないかも。……とかね。

読解問題1「きわめて困難な、ほとんど不可能な企て」とあるが、なぜか。

☆傍線部延長。なぜ↓どのように過程の説明。指示内容の補い。

「そうである以上、英語を使って、「英語話者には見えない事象」、「英語話者がこれまで一度として言語化したことがない概念」を語るということは、きわめて困難な、ほとんど不可能な企てだということがわかる。」

「こうこうこういう過程を経ているので、英語話者が言語化したことがない概念を語ることはできない。」

ほとんど本文の語句のつなぎ合わせでできる。

【解答例】英語学習者は、英語圏の人々が日常的に繰り返す言い回しを覚え、英語的な発想法や世界の切り取り方を身体に刷り込むことで英語を話せるようになるが、その中には、英語話者が言語化したことがない概念は含まれていないから。

これを元に、短くしたければすばいい。次のような表現を使ってもいい。

「英語の言い回しを覚え、使うことは、英語的な発想に（自分の）発想を限定することだから。」

⑤ それは英語に堪能になり、英語的発音、英語的表情、英語的身ぶりが自動化してくるにつれて、「英語の語彙にない概念」や「英語圏では記号化されていない事象」を語ろうとする意欲が急速に減退してくる経験に通じている。

「それ」⇨欧米から見た日本社会についての固定観念を語ってしまうこと。⇩英語の語彙にある概念しか語ろうと思わなくなる。では、英語で語るとき、英語の語彙にない概念は、自分の中から消え去ってしまったているのか？

⑥ 「他者の言葉」とは中性的なコミュニケーション・ツールではない。「他者の言葉」はそのつとすでに「他者の精神」を血肉している。「他者の言葉」を借りて語ることは「他

者の精神」を内面化することである。

「その言葉」を借りて語ることは「その精神」を内面化し自分のものにする。言葉は精神を帯びる。このように一般化できるなら、英語に限らず、新たな言葉を「マスター」することは、その言葉が帯びている精神を自分に乗り移らせるということになる。

「べらんめえ」でしゃべれば江戸っ子の、ウチナーグチでしゃべれば、沖縄の精神が内面化するってことだな。

⑦ それは私たち自身が日常的に経験していることである。たとえば、「怒り」の感情は「怒り」の表情や怒号を必ず随伴する。声を荒立て、表情を険しくすることによって怒りの感情がいつそう高揚することを私たちは知っている。怒りの感情がまずあって、それが表出されるのではない。外形的な「怒りの演技」を通じて、「怒りの感情」が内面に食い込んでくるのである。

言葉から、さらに一般化されている。言葉（声）は、表情・怒号（身体反応、外形）に対応する。そういえば、英語になると、日本語の時にはしない、手振りをつけたくなるね。表情の動かし方、声の出し方も英語っぽくなる。Really? っていうときと、「ほんまか？」というときと、声の高さもちやうよな。英語っぽい演技のとき、内面も英語っぽくなる。悲しい演技をすると、内面も悲しくなる。逆じゃない、と筆者はいう。

これは、心理学的にも証明されていること。筆者の思いつきではない。例えば、新生児は保護する人の微笑みを反射的にマネすること（外面）を通じて、その後、微笑みに対応する内面を獲得する。（だから、ヤバイとき、まず微笑んでみれば、気分はおちつく。これはやってみる価値あり。）

⑧ 私たちはある日、自分の子供に向かって、**読解問題2** かつて私たちの父母が私たち自身に向かって告げたのと同じ言葉を、同じ表情と同じ身ぶり、同じ苛立ちと同じ満たされなさを通じて語っている自分自身を発見する。そのときに私たちは親たちの価値観や美意識がすでに抜きがたく血肉化してしまっていることを知って愕然とするのである。

ああ、それでそうなるのね。母語は、親から学ぶ。そのとき、言葉を学んでいるだけではなくて、表情やジェスチャー、そして、その内面（価値観、ものの考え方）も引き継いでしまっている。もちろん、よいものも、悪いものも。

読解問題2 「かつて私たちの父母が私たち自身に向かって告げたのと同じ言葉を、同じ表情と同じ身ぶり、同じ苛立ちと同じ満たされなさを通じて語っている自分自身を発見する」とあるが、なぜか。

☆なぜか↓プロセスの説明。ここまでの理屈を、父母のケースにあてはめればいい。

● 一般的に、「外形の模倣」↓「内面化」。

● 言語も、「言葉の模倣」↓「精神の内面化」。

● 父母の言語の模倣↓父母の精神の模倣。

この三段階を説明すればいい。本文の言葉をつないで、ざくざくつ書くと、

【解答例1】 外形的な「怒りの演技」を通じて、「怒りの感情」が内面に食い込んでくるのと同じメカニズムで、言葉の模倣と習得を通じて、その言葉に固有の価値観や美意識が内面化される。父母から言葉を習得する場合も、その模倣を通じて、親たちの価値観や美意識をいつのまにか内面化し、反復することになるから。

短くするには？ 言語の部分、父母に関する部分に焦点を当て直して。

【解答例2】 言葉をまねることを通じて、その言葉に伴う感情や考え方が内面化されるので、子どもたちも親の言葉をまねることによって、親の言葉に伴っていた感情をいつのまにか内面化してしまうから。

もっと短くするなら、後半だけでもいい。

【解答例3】 子どもは親の言葉のまねを通じて、言葉に伴っていた感情をいつのまにか内面化するから。（四〇字）

「内面化」については、傍線部直後に「そのときに私たちは親たちの価値観や美意識がすでに抜きがたく血肉化してしまっている」といいかえられている。これを使っても可。

⑨ ある種のストックフレーズの発語（「世の中、所詮は色と欲だよ」とか「俺は人間の弱さが嫌いなんだ」とか、何でもいければ）とその内的確信は同時に生起する。発語しなければそのような価値観は内面化されないし、内面化されなければ発語されない。そして、ひとたびそのようなストックフレーズを口にしてしまった人間はもう二度と「そのような言葉を一度も口にしたことのない人間」には戻れないのである。

ストックフレーズとは、ストックしてあるフレーズ。決まり文句だ。英語のスピーキングでは、「反射的に使えるフレーズをストックしましょう」なんていわれるが、あれ。

発語と内的確信は同時。何かを確信してから、発語する、という順番ではなく、口にした瞬間に、その考えが胸に宿る。今なら、ネットのどこかで流れているようなストックフレーズを、ついツイートしてしまったとたん、そのフレーズが流れているタイムラインに

漂う、ある感じ方が自分の中に宿る。ストックフレーズはストックフレーズを呼び、内的確信は固着する。だれかと諍いさかいになるときを想像してみてもいい。つい言っちゃったことばが、感情を形成する。後戻りできない感じになつていく――

⑩ 「ある言語のイデオロギー性が、話者の自由と主体性をどのように損なっているのかを、その当の言語を用いて、反省的に記述することは可能か？」という古典的な哲学的難問については、プラトン以来実に多くの哲学者が省察を重ねてきた。

ちと難しそうな言い回し。例えば、日本語を使うと、どうしても日本語特有のもの考え方（信念・イデオロギー・そういうもんやっていう考え）を帯びてしまう。でも、それでは自由がない、言葉に縛られてるじゃん、と考え直し、日本語特有のもの考え方じゃない考え方へ抜け出したい、そしてその場所から、日本語特有のもの考え方ってどんなのか、日本語を使って（英語じゃよう言わんで（笑））言ってみたい――そんなことできるの？ いろんな哲学者がその問いを考えてきたというのだ。

ぼくらは言語の外に出られるのか？

⑪ 私たちは必ずや「すでに存在する言葉」の中に生まれてくる。

⑫ 私は日本語話者であるが、この言語学的環境を私は自分で選んだわけではない。しかし、私の思考や経験の様式は、私が現に用いている日本語によって深く規定されている。そればかりか、私自身の思考が日本語によってどのように制約されているのかを問うときでさえも、私はその反省を「私自身の思考を制約している当の日本語」を用いてしか行うことができない。

ここで問題となつていることの根っこには、われわれは、言葉を使って思考する、という事実がある。逆にいうと、言葉を使つてしか思考できない。言葉の限界が、思考の限界だ。数学も、自然言語ではないが、言語の一種である。自然数と四則計算の概念しか知らない者には、その範囲内の数学的思考しかできない。自然言語、特に母語は、われわれの思考の限界線を示す。

⑬ この「出口のない」ループの中に私たちは閉じ込められている。この閉じられた存在の仕方の元型を私たちはプラトンが『国家』で引いた「洞窟の比喻」に見ることができ。

これ、有名。ユーチューブで、アニメ化した動画が見られる。見てみるといい。

⑭ 洞窟の中に生まれ、手足を縛られて、洞窟の奥のスクリーンに緑り広げられる「影絵人形芝居」だけを眺めて育ってきた人間がいるとする。その人は、影絵の世界こそが真実

の世界だと思い込んでいる。だから、かりに無理に洞窟の外に引き出されて現実の陽光を示されても、眩しく眼は痛み、陽光から目を背けて、踵を返して洞窟の中に帰ろうとするに違いない、とプラトンは書く。

彼は、苦しがり、引っぱっていかれることに苦情を言い、いざ太陽の光の見えるところに来たとしても、眼は光輝に満たされて、いまや真実であると言われていたものは、一つも見ることができないのではなからうか。

⑯ 私たちそれぞれの言語は私たちそれぞれの洞窟であり、私たちが真実の経験であると思いついて入るものはそれぞれの穴居生活に固有の「影絵芝居」なのかも知れない。だからといって、「地下の住居から、力づくで」誰かに引っぱり出されても、私たちにそこ輝いているのが「陽光」であるのか、別の洞窟で演じられている「眩しい影絵芝居」であるのかを**読解問題3**判定する権利を持たない。

この比喻と言語の話はどう結びつくのか。

言語から出られない洞窟から出られない、が等式。これにしたがって、二文目以下をいいかえてみよう。――私たちが真実の経験（考え）であると思いついて入るものは、使っている言語に特有のもの考え方にすぎない。だからといって、母語の世界から、力づくで引っぱり出されても、私たちには、母語を使わない生活を通して見えるものが、真実であるのか、別の言語に縛られた、特有のもの考え方なのか、結局はわからない。

⑰ おそらく、心の弱い人間は、陽光から眼をそらして、もとの洞窟に戻してくれと泣訴するだろう。洞窟の中の暗闇は、ある意味では、母の胎内にも似た居心地のよい場所でもあるからだ。そこにとどまる限り、自分の見ているものが「現実」であるのか「影絵」であるのかの判定に苦しむ必要もないし、果たしてその真偽を判定する権利が自分にあるのかという答えられない問いを引き受ける必要もない。

⑱ しかし、人間は「洞窟の外」へ引き出されるといふ宿業を負っている。というより、そのような苦痛を引き受けるものだけが「人間」と呼ばれるのである。

母の胎内＝母語の中に留まることは心地よい。外へ出ることは苦痛だ。外へ出る者が「人間」だ、と筆者は言う。では、それは、外国語の世界へいくことなのか。それも一つの脱出だろう。しかし、それは、たんに（例えば）英語という別の洞窟の世界へ移り住むことではないと思われる。そこにはその「固定観念」が巢食っている。

「影絵」が「影絵」だと気づくためには、さまざまな言語のインストールを越えた、別のプロセスが必要だと思われる。母語という生活言語の体系の中でも、気づくための解放は可能だろうし、逆に、いくら外国語を習得し、異文化に身を置いたとしても、臆見から

逃れない人は逃れられないだろう。

どうすれば？——課題として残しておこう。

読解問題3 「判定する権利を持たない」とあるが、なぜか。

問いを噛み砕く。☆傍線部延長。☆なぜ↓どのように。

「私たちにはそこで輝いているのが「陽光」であるのか、別の洞窟で演じられている「眩しい影絵芝居」であるのかを判定する権利を持たない」とは、どういうことか。

もつとかんたんにしよう。

「私たち」は「陽光」か「影絵」か判定できない。」とは？

・「私たち」|| 洞窟の中に生まれ、スクリーンの影絵だけを眺めてきた人間。影絵の世界こそが真実の世界だと思いついて入っている人間にはわかる。

・「陽光」|| 真実の世界。洞窟の外の世界を知っている人間にはわかる。

・「影絵」|| 真実ではない世界。

これを当てはめてみると、

「洞窟の中に生まれ、真実ではない世界だけを眺め、その世界だけが真実の世界だと思いついて入っている人間は、洞窟の外の世界を知っている者にはわかる真実の世界が、本当に真実なのか、判定することができない。」

言語の話に置き換えると、

「ある言語の世界に生まれ、その言語に特有の世界の見方だけが真実だと思いついて入っている人間は、それ以外の見方を知らないため、真実の世界があったとしても、本当に真実なのか、判定することができない。」

問いに合うように文末を変えて、

【解答例】ある言語の世界に生まれ、その言語に特有の世界の見方だけが真実だと思いついて入っている人間は、それ以外の見方を知らないため、真実の世界があったとしても、本当に真実なのか、判定することができないから。

設問が、言語のこととして問うているのか、比喩のままに答えさせようとしているのか不明。しかし、入試では、ふつう、ここに置かれる問いは、「本文の趣旨を踏まえて」答えよ、となる。

ここでは、「私自身の思考が日本語によってどのように制約されているのかを問うときでさえも、私はその反省を「私自身の思考を制約している当の日本語」を用いてしか行うことができない」という問題意識に対する答えとして書いた。「洞窟の中で、洞窟自体、影絵自体を問う」ということだ。

しかし、先にも書いたように、筆者の主張の方向性は、「出られる」にある。本文は、そこで終わっているけれど。

■読解問題

- 1 「きわめて困難な、ほとんど不可能な企て」とあるが、なぜか。
- 2 「かつて私たちの父母が私たち自身に向かって告げたのと同じ言葉を、同じ表情と同じ身ぶり、同じ苛立ちと同じ満たされなさを通じて語っている自分自身を発見する」とあるが、なぜか。
- 3 「判定する権利を持たない」とあるが、なぜか。

●重要語「イデオロギー」|| 信念、と置き換えて読めば意味が通じる。特定の立場からの信念（の体系）。

■発展問題

では、どうやって、出るのか。考えて、論ぜよ。次の文章も参考にしなさい。「バカでもない」ということばを「洞窟の中にいるままでもいい」と重ねてみなさい。

（毎日新聞2019年2月22日 東京夕刊——省略あり）

1月29日に亡くなった作家、橋本治さんは、声高に主張したり、論破したりしない人だった。なのに、さらっと出てくる比喩や冗談が聞く者に新たな学びを促す不思議な力があった。

書店の橋本治追悼コーナーには「バカ」という文字が目立つ。「バカにバカ」って言うても通じないこの国で（ちくま新書）『バカ化する世界』の正体（集英社新書）。いずれも新書の帯にあるコピーだ。橋本さんがよく使った「バカ」という言葉の定義は「たとえ世界が終わっても」（2017年、集英社新書）に何度か出てくる。

「バカ」とは（自分が社会の小さなひとコマで、社会の上に乗っかって生きているんだという「地動説」ではなく、自分の頭の中で社会が回っている「天動説」の中で生きていて、社会と切り離された「根拠のない自我」だけが勝手に膨らんでしまった人たち）（一部略、以下同）を指す。

自分をどこまで突き放し客観視できるかが大事だと言っているように思える。時代論が好きだった橋本さんはよく、1980年代以降、自我がふくらんだ人が急増したと語っていた。

集英社新書編集部長の樋口尚也さんによると、「橋本さんに書き下ろしをお願いしたら、『世代も違い、言葉も伝わらない人たちとやりとりすることで自分の考えを整理したい』と提案されたんです」。

橋本さんが聞き手の若い編集者の穂積さんを批判する場面が出てくる。

（ホヅミ君の疑問の持ち方って、ある傾向があるんだ。私は今の日本社会のあり方に文句言ってるだけで、あなたを責めてるわけでもない。でもまるで自分の生き方を批判され

たみたいに「なぜですか？」って来るじゃん。世の中は自分の外側であって、世の中が動けば、自分も動くことがあるし、動かないこともある。ズレやギャップがある。それが普通の考え方なの。でも、あなたは世の中と自分がシンクロしてるの。「世の中はそうだけど、自分は関係ないな」っていうより、「自分がこうなら、世の中もこう」っていう考えだから「世の中」が丸ごと自分の頭の中に入っちゃうの」

誰かが「日本人批判」を展開すると、「違う」とムキになって反論する人が時々いる。その人が批判されているわけではないのに、自分のことを言われたと思ってしまう。バブル以降、そんな人が増えてきている現実を橋本さんは「バカ」という言葉で食い止めようとしたように私には思える。世の中でも国でも性別でも、自分が属している「塊」の外に君はいていいんだよ。塊との間にズレを感じながら、つかず離れず、斜に構えていいんだよ、とでも言うように。

それができない人をあえて「バカ」と呼んだのは、バカは恥という感覚がまだ残っていると思っていたからだ。だが、私とのインタビューで橋本さんは「でももう、バカは恥という感覚さえも日本人から消えつつある」とこぼしていた。

15年7月のインタビューで橋本さんは、無知が笑いのタネになる風潮をこう話していた。

「テレビの場合、『物を知らない人が笑えて面白い』というふうになったのは80年代です。バブルとともにみなバカになったと考えると考えれば間違いないですね。貧乏と闘う知恵と教養を身につけることを『バカじゃないの』って言う人が増えてきたころです」

ドラマでも漫画でも父親の存在感が消え、戦後派の文学が売れなくなり、軽薄短小と言われた時代。人はなぜ「バカでもいい」と思うようになったのか。橋本さんの答えはこうだ。

「一種の許しでしょ。勉強できないってことで抑えつけられて萎縮していた人が、『それでいいじゃないか』となったんですよ。急激な変化に見えるのは経済が影響している。「すごく簡単な話だ」と思います。バカの方が数が多いから、バカを相手にした方が商売になるんです。絶対そうだと思う。映画を見ても大人が見る映画ってどんどんなくなってきたじゃないですか。あんちゃんとかねーちゃんの恋物語かへんてこりんな陰湿な話しかないっていう、そういうのを好む人が多いんです」

そこまで言うとは橋本さんは話を「恥」の方に移した。

「物を知らないとみんなが幸せになれるっていうとんでもない風潮ができあがったもので、かつて日本社会にあった恥の文化がもうないんです。町を歩いている人がマイクを突きつけられて、とんでもない間違いを言っても平気で笑っているじゃないですか。あれを見ると、恥つてのはこの国になくなったんだなって思いますよ」

世の中、どうすれば良くなるかという私の問いに橋本さんはこう答えた。

「(知性を重んじない) 短絡した方向にやけくそになって行くか、ちょっと待てよって踏みこたえて、今までのことをもういっぺん考え直さなきゃって方向に行くかですね」